Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-31

# 会話においてフィラーを発するということ

定延, 利之

(Citation)
音声研究,14(3):27-39

(Issue Date)
2010-12-30

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001892

Phonetic Society of Japan

音声研究　第14巻第3号
2010(平成22)年12月
27-39頁

Journal of the Phonetic Society
of Japan, Vol. 14 No. 3
December 2010, pp. 27-39

特集論文

# 会話においてフィラーを発するということ

定　延　利　之*

# Uttering Fillers in Conversation

Toshiyuki SADANOBU*

**SUMMARY:** This paper examines the nature of filler speech in conversation by observing its five characteristics: untranslatability; unmistakability; essentiality/prohibitivity; capability of being "hopeless"; and privilegedness. Firstly, it is pointed out that no language's filler is rigidly translatable into other languages, which indicates that filler has a social as well as cognitive aspect. In order to integrate both aspects, we need a new socio-cognitive view of filler as a manifestation of the cognitive process the speaker is undergoing. The traditional view of conversational speech as an intentional act of transferring information cannot explain the facts of fillers, such as that fillers are inherently unmistakable for native speakers, that fillers look to be necessary/prohibited in accordance with situations, that fillers can be "hopeless," and that fillers can the privilege only of particular people of special status in the conversation.

**キーワード**：フィラー，翻訳不可能性，絶望的フィラー，特権性，（不）生起の義務性，誤用不可能性，意図，伝達

## 1. はじめに

現象の記述が，それを記述するための枠組みと不即不離の関係にあるということは，すでによく知られている。採用される記述枠組みが問題をはらんでおり記述が歪んでしまうという危険を警戒しなければならないのは，どのような研究分野でも同じだろう。にもかかわらず会話音声の研究においてこうした認識が特に必要と思えるのは，そもそも「会話において発話すること」に対する我々の理解がまだ明らかに不足しているからである。

本稿は，現代日本語共通語（以下「日本語」）の会話音声の観察をもとに，「会話において発話すること」に対する我々の理解を，特にフィラーに具体化させた形で深めようとするものである。ここで言う「フィラー」(fillers) とは，伝統文法の「感動詞」とほぼ重なり[1]，実質的内容が希薄で，生起位置が統語的に制限されない語群を指すものとする。

具体的な観察の前に，フィラーをめぐる筆者の問題意識をかんたんに述べておく。

## 2. フィラーをめぐる問題意識

伝統的には，フィラーは価値のない雑音として無視されてきた。これは，たとえば発話「えーと，田中です」が発話「田中です」と同一視されてきたということである。「フィラー」（壁のひび割れなどの隙間をふさぐ詰め物）という命名じたい，そのような否定的な考えに基づいてなされたものだとされる。しかし，現在では「研究成果が最も活発に発表されているテーマの一つ」(Schiffrin 2001) と位置づけられるように，フィラーに対する見方は大きく変わっている[2]。

このようにフィラーが高く評価されるように

* 神戸大学（Kobe University）



NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan



なった契機として見逃せないのは，「フィラーの観察が人間心内の認知行動の解明に役立つ」という認知科学的な考えの広まりである。これは，フィラーは適切な文脈が一つ一つ異なるが，それはフィラーを発しながら話し手がおこなっている認知行動の違いによるのではないか，という考えとも言える。たとえば，常識的に考えれば，フィラー「えーと」と「あのー」はともに「何らかの問題を検討中」という文脈で発せられるが，細かく観察すれば，「123 足す 456 は？」と計算のクイズを出された返答の発話としては，「あのー，579」よりも「えーと，579」の方が自然である。また，見知らぬ人に話しかける際には「えーと，ちょっといいですか」よりも「あのー，ちょっといいですか」の方が丁寧である（定延・田窪 1995）。それぞれのフィラーの適切な文脈をより詳しく観察することによって，【「えーと」の「何らかの問題」は幅広いが，「あのー」の「何らかの問題」は，自分がこれからしゃべることばの問題にかぎられている】ということ，つまり自分がこれからしゃべることばの問題の処理が一般的な問題の処理とは心内で区別されているということが見えてくる。フィラーの観察が認知プロセスの解明に役立つというのは，たとえばこういうことである。

しかしながら，こうした認知的な観点だけでは，フィラーの全体をとらえることはできない。たとえば英語なら "um" や "let's see"，中国語なら "neige" や "shemme laizhe" という具合に，何らかの問題を検討している最中に発せられるフィラーだけをとっても，通言語的にさまざまなものがあるが，それらの中で，適切な文脈が厳密に一致するものは見いだされていない。この第 2 節冒頭に挙げた発話「えーと，田中です」にしても，日本語では，田中という人物が誰何されて答える文脈でこういう発話が特に違和感なくおこなわれ得るが，これをフランス語に直訳すると，（自分の名さえ即答できないという）愚鈍きわまりない異常な発話になってしまう（定延 2007a）。つまり，（他のことばと同様）フィラーは厳密には他言語に翻訳できない。だが，さまざまな言語の話し手どうしで，心内の認知行動のありようが何ひとつ一致しないということは，おそらくありそうにないだろう。これは，或るフィラーが発せられる文脈が，そのフィラーと結びつく認知行動だけでは説明し尽くせない，ということである。フィラーが発せられる文脈を考えるには，フィラーの認知的な側面だけでなく，社会的な側面（話し手と他の会話参加者との関係）にも注目する必要があるということになる。

では，会話の中で発せられるフィラーの，認知的な側面と社会的な側面は，いかに統合されるのだろうか？　単に「フィラーを発するとは，自分がこれこれこのような認知行動の最中であると会話相手に伝達することである」といった常識的な考えでよいのだろうか？—このような問題意識のもと，以下では（いま述べた「厳密な翻訳の不可能性」に加えて）フィラーの特徴をさらに観察してみよう。

## 3. 「さー」の絶望性

ここで取り上げるのは，フィラーというものは「絶望的」になり得るということである。日本語の場合，何事かを検討している最中に発せられるフィラーとしては，前節で見た「えーと」と「あのー」以外にもさまざまなものがある。「さー」もその一つであり，「あのー」と同様，もっぱら会話で発せられるが（「えーと」は「えーと，手帳はどこに置いたかなー」のように独り言でも発せられる），「さー」は際だった特徴を持っている。それは，「さー」の後に話し手が続ける発言内容は必ず，会話相手の期待に沿わないということである[3]。「後続する発言内容が相手の期待に沿わない」というフィラーの性質を「否定的性質」と仮称し，フィラーの否定的性質が例外を持たないことを「絶望性」と仮称すると，「さー」はまさにこの絶望性を持つフィラー，絶望的なフィラーということになる。

「さー」の絶望性をとりあげた論考は拙論（定延 2002, 2005 など）の他になく，それらもかんた



NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan



んな指摘以上のものではない。そこで，この結論を支える（筆者自身の内省以外の）根拠を以下4点挙げておく[4]。

第1点は，自然会話の調査結果である。自然会話100時間から「さー」が現れている発話を22例採集したところ[5]，そのすべてが次の（1）のような，否定的な発言が続くものであった。

（1）女性：ねーねー　植民地にねー　なる国とねならない国の差ってのはどこにあると思う？
男性：さーうーんー　どこにあんにゃろねーんー

例（1）は，一組の男女（ともに関西方言の中年層話者）の対話の一部である[6]。ここでは，「植民地になる国とならない国の差はどこにあると思うか」という女性からの問いに対して，男性は「さー」と述べた後，「うーんー」とさらに悩んでみせ，「どこにあんにゃろねー」（どこにあるのだろうねえ）と述べて「んー」と再び考えるという一連の発話をおこなっているだけで，「2種類の国の差はこれこれこうだ」というような，女性の期待する返答は返していない。

第2点は小説・戯曲の調査結果である。小説・戯曲60作品から「さー」を100個採集したところ，そのすべてが次の（2）のような，「さー」の後に否定的な発言が続くものであった。

（2）（しづ）たとえば？　たとえば，それは，どんなところでしょうか。
（奥田）たとえば，……さあ，……（口ごもる）
（太宰治1946『春の枯葉』）

戯曲の例（2）では，しづ・奥田という2人の人物の対話が描かれており，ここでは，しづの発した問いに対して，奥田が「さあ」と述べた後，口ごもって，結局，返答を返せていない[7]。

根拠の第3点はアンケート調査の結果である。Xが通りすがりのYに交番のありかを訊ね，Yがそれに応答する対話として（3）を作り，「さー」に続くYの返答（a）（b）（c）それぞれについて，自然さを被験者102名（神戸・京都の大学に通う若年層話者で男性61名，女性41名）にアンケート調査したところ，

（3）X：あ，すいません，このあたりに交番ありませんか？
Y：さー，
a. 交番はあの角を曲がったところにあります。
b. このへん交番はないですね。
c. ちょっとわかりません。

Yが「さー」後にXの期待に沿う発言を続ける（a）は被験者102名のうち1名しか容認せず（この被験者の判断については第6節で後述する），Yが否定的な発言を続ける（b）や（c）（容認者はそれぞれ86名，102名）とは好対照をなした。なお，否定的な発言を（b）（c）のように二分したのは，否定性の原因が話し手の外部にあるか，内部にあるかという基準によるものである。「このあたりに交番がない」という地理的原因は話し手Yの外部にあり，「このあたりの地理に詳しくない」という認知的原因はYの内部にある[8]。

第4点は，談話完成課題の結果である。次の（4）の下線部に適当な語句を書き入れて，XとYの対話を完成させよと被験者59名（神戸・京都の大学に通う若年層話者で男性35名，女性24名。但し第3点の被験者とは重複していない）に指示したところ，

（4）X：あ，すいません，このあたりに交番ありませんか？
Y：さー，＿＿＿＿＿＿＿＿。

上の（3b）に相当する語句（たとえば「このあたり交番はないですけどねえ」）や（3c）に相当する語句（たとえば「すいませんちょっとわかんないです」）を書き入れた被験者が確認できたのに対して（それぞれ4名，53名），（3a）に相当す



NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan



る語句を書き入れた被験者は確認できなかった。一見，(3a) に相当するかに思える語句は2例得られたものの（「さー，たぶんこの次の交差点を右に行けばあると思います」「さー，あるんじゃないですか」），実際はこれらは (3a) ではなく (3c)（すなわち「ちょっとわかりません」タイプ）に相当する。というのは，これら2例は，「よくわからないのだが」という自信の無い態度を必須としているからである。これら2例から，自信の無さにつながる部分（「たぶん」「と思います」「んじゃないですか」）を取り除いてしまうと，これら2例は「さー，この次の交差点を右に行けばあります」「さー，あります」となる。10名の日本語母語話者（神戸の大学に通う若年層話者で男性4名，女性6名。上記2調査の被験者とは重複していない）に対する調査では，これらはいずれも不自然である。

以上の4つの根拠によって支持される「さー」の絶望性は，話し手が「さー」を発する時点で，「続いて発せられる返答の内容（つまり自分の検討の結果）は否定的なものだ」ということが話し手の心内ですでに確定しているということを示している。

このことは，「検討中に発せられるフィラー」という「さー」の位置づけを疑わしく思わせるかもしれない。そして，「さー」は検討中のフィラーではなく，検討が終了して相手に返答すべき内容が確定した後に「これからあなたにとって否定的な内容を言いますよ」という前触れのことばなのであって，話し手は聞き手が否定的な内容の発言を受け取るショックを和らげるために「さー」を発している，といった考え（以下「前触れ」説）がもっともらしく思えてくるかもしれない。また，このような前触れ説は「道をたずねられて否定的な内容の返答を返す場合，「さー」無しよりも「さー」有りの方が丁寧に聞こえる」というアンケート調査の結果からすれば，さらにもっともらしく思えるかもしれない。下の (5) の (a) (b) と (a′) (b′) について，被験者10人（神戸の大学に通う若年層話者で男性5名，女性5名。上記3調査の被験者とは重複していない）に印象を自由記述させてみると，

(5) X：あ，すいません，このあたりに交番ありませんか？
　Y：a. このへん交番はないですね。
　　b. ちょっとわかりません。
　　a′. さー，このへん交番はないですね。
　　b′. さー，ちょっとわかりません。

「特に差は無い」とした被験者は2人にとどまり，残り8人は (a) (b) について「つっけんどん」「冷たい」「けんか腰」，(a′) (b′) について「ソフト」「丁寧」「やわらかい」などと記述した。

だが，この後ですぐ示すように，実際には前触れ説は正しくない。このことを以下，3点の根拠を挙げて示す。

第1点は，「さー」の後に検討中のフィラーが生じ得るということである。この実例を我々は既に見ている。本節冒頭に挙げた自然会話の断片 (1) における男性の発言「さーうーんーどこにあんにゃろねーんー」では，「さー」の後に「うー」「んー」「どこにあんにゃろねー」「んー」ということばが続いている。このうち少なくとも「うー」「んー」が検討中のフィラーであることに異論はないだろう。もし「さー」を発する段階で話し手が「これからあなたに否定的なことを言いますよ」と言っているのであれば，その後に検討中のことばが現れていることは説明困難になってしまう[9]。

第2点は，「さー」ということばが伴う非言語的動作である。「さー」はしばしばりきんだ声で，相手から目を逸らせた渋面で，首をかしげる，あごに片手をやる，腕を組むなどの動作と共に発せられる。これらのうち，りきみと渋面（Sadanobu 2004, 定延 2005），相手からの目の逸らし（定延 2007b）は，検討中の場合だけでなく，相手にとって否定的な内容を告げる場合にもよく現れるし，首かしげもこれらと同様に見なしてもよいかもしれない。だが，片手のあご接触や腕組みは，もっぱら検討中におこなわれるものであって，相手に



NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan



とって否定的な内容を告げる場合にはおこなわれない。少なくとも，片手のあご接触や腕組みと共に発せられる「さー」は，やはり検討中に発せられるフィラーということになる。

第3点は，「さー」の生起は必ずしも丁寧な印象をもたらさないということである。「さー」が「これからあなたにとって否定的なことを言いますよ」という前触れのことばであるなら，「さー」を発すれば大抵の状況でそれだけソフトで丁寧になりそうなものだが，たとえば前掲（1）には，「さー」があることで丁寧になっているという印象は無く，また家族から何か聞かれて「さー知らない」と答える場合も，「知らない」と比べて丁寧というわけではない。「さー」は（3）（5）のような，Yが相手Xからの問いかけを無視してしまっても特にとがめられないような「通りすがり」の関係にある場合，それも，Yが丁寧な「です・ます」調で答える場合に（さらに音調次第で）初めて丁寧な印象をもたらし得るのであって，「さー」と言いさえすれば常にそれだけ丁寧になるというわけではない。

以上3点の根拠により，「さー」に関する前触れ説は正しくないと考えることができる。では，それにもかかわらず，我々がともすれば前触れ説に惹かれてしまい，「検討中に発せられる絶望的なフィラー」という存在をいぶかしく感じてしまうのはなぜか？

その原因は，我々が，会話における発話というものを，意図的な伝達と片付けてしまい過ぎることである。この節で見たように，たしかに「さー」は絶望的なフィラーである。しかし，検討中に絶望的なフィラーを発することがいぶかしく感じられるのは，単に「さー」が絶望的であるからではない。いぶかしく感じられるのは，我々がこの「さー」の絶望性を「意図的な伝達」の枠組みにはめ込み，【話し手は「さー」を発することで，その絶望性を意図的に聞き手に伝達しようとしている】と考えればこその話である。そして，【「さー」は検討終了後に「これからあなたにとって否定的なことを言いますよ」という前触れとして発せられる】という前触れ説がもっともらしく見えるのも，前触れ説がこの考えに適合するからに他ならない。

だが，上に示したように，実際には前触れ説は不当である。つまり，前触れ説を有望なものに見せていた，【話し手は「さー」を発することで，その絶望性を意図的に聞き手に伝達しようとしている】という考えは正しくはない。会話の中で話し手の発話（「さー」）を聞いて外部者（聞き手）が或る意味（絶望性）を得るとしても，その意味を無条件に「話し手によって意図的に伝達されたもの」と考えることは誤りである。

会話におけるフィラーの研究において，フィラーの認知的側面と社会的側面を共存させるために「マーカー」という考えが導入されることは珍しくない（たとえばSchiffrin 1988, 2001）。だが，この「マーカー」があくまで聞き手にとってのものであって，話し手の「マークする意図」とは必ずしも結びつかないということには注意が必要だろう。話し手の或る発話（「さー」）が或る意味（絶望性）の「マーカー」として聞き手に利用できるとしても，それは話し手が聞き手に利用させようと「マーク」したものとはかぎらない。

では，会話においてフィラー「さー」を発する話し手が，絶望性を意図的に伝達ないしマークしていないとしたら，話し手は何をしているのだろうか？　フィラーの認知的側面と社会的側面はいかにして統合されているのだろうか？　このことを論じるために，まず，会話において発話するという行動を2つのレベルに分けてみよう。

## 4. 会話における行動の2つのレベル

会話におけるコミュニケーション行動そして発話は，「あからさまなレベル」と「あからさまでないレベル」に分けて考えることがしばしば有益である。（ここで言う「あからさま」とは，基本的には日常語の「あからさま」と同義だが，日常語「あからさま」にともすれば伴う「露わにされるべきでないものが露出している」といった否



NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan



定的なニュアンスは，ここでの「あからさま」には無いものとする。）以下，このことを，「さー」の絶望性とは直接関わらない2つの観察を挙げて示す。

最初に挙げる観察は，認識の修正に関するもの（定延2010b）である。たとえば，第三者によって用意されたレンタカーに4人で乗り込んだはいいが，なぜかアクセルを踏んでも車が動かないとする。この時，（おかしいな）（燃料は入ってるよな…）などと不思議に感じ，原因を探すことは4人ともできる。そして，サイドブレーキがかかっていることを発見した際には，次の（6a）のような発話をおこなうことが4人とも問題なくできる。

(6) a. あ，サイドブレーキかかってる！

ところが，(6a) と同じ状況で，(6b) のような「た」の発話をおこなうことは，誰にでもできるというわけではない。

(6) b. あ，サイドブレーキかかってた！

発話（6b）は末尾の「た」によって，「車が動かない原因は謎だったが，サイドブレーキだ」という認識の修正をあからさまにする。このようなあからさまな修正ができるのは，基本的には運転席に座った者（車の運行を自分のこととして責任を引き受けた者）だけであり，たとえば後部座席に乗っている子供は，（6a）の発話はできるが，よほど「自分の問題として気持ちを込めて」不思議がり，原因をさがしていないかぎり（6b）の「た」発話はできない。「認識を修正すること」は4人が（6a）を発する際にも心内でおこなわれるが，(6b)を発して「認識をあからさまに修正すること」は運転席に座った「責任者」だけの特権的な行動であり，両者は別物である[10]。

なお，誰が「責任者」なのかはあくまで会話の進展の中で決まる。いまのレンタカーの事例を使えば，5人目の田中がなかなか来ないとする。「今日は田中は仕事がないから，ここに必ず来るはず」と一人が言い，皆はそうかと思って田中を待つ。そのうちに，そこにある紙片を誰かが何気なく裏返すと，それは田中の勤務予定表で，今日は仕事が入っている。この時，（7a）のように言って認識を修正することはその場にいる誰にでもできるが，

(7) a. あ，今日は田中，仕事だ！

これとは違って，（7b）のような「た」の発話で，認識をあからさまに修正することは，「田中は来るはず」と言って会話を（ミス）リードした者にしかできない。座った座席が運転席かどうかということは，ここでは関係しない。

(7) b. あ，今日は田中，仕事だった！

認識の修正については以上である。続いて，第2の観察として，挨拶を取り上げてみよう。お互いに「おはよう」と挨拶し合える対等の間柄であっても，「おはよう」と言われて「うん，おはよう」と返すのは失礼と感じられがちである。また，「おはようございます」は丁寧なことばづかいの挨拶だが，直前に「はい」を付けて「はい，おはようございます」にすると，「先生，おはようございます」と挨拶してきた下位者の生徒に対して上位者の先生が鷹揚に返答するといった情景が浮かびがちで，下位者の挨拶としては考えにくくなる。このように，相手の挨拶を受けて挨拶し返す場合，冒頭に，相手の挨拶を受ける肯定系のフィラー「うん」「はい」を付けると発話が偉そうなものになりがちである。この原因は「挨拶の同時性」に関わっている。同時発話が避けられる傾向にある礼儀正しい会話においても，挨拶は例外的に重複が許されており，たとえばXがYに「おはようございます」と挨拶してきた場合，YはXが挨拶を最後まで言い終わるのを待たず，そのXの挨拶にかぶせるように「おはようございます」とXに挨拶し返してもよい。このように少なくとも同列の者どうしの間には「挨拶は同



NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan



時に交わされるもの」という意識が見られるが，ここで言う「同時」とはあくまで見なされるものであって，実際にはXの挨拶が終わり，それを受けてからYが挨拶し返すという時間差が有っても必ずしも失礼とは感じられない[11]。にもかかわらず，「うん」「はい」が発話を偉そうなものにしてしまうのは，「相手の挨拶をあからさまに受ける」ことでこの同時性の見なしが阻害されてしまうからである。このように，「相手の挨拶を受けること」と「相手の挨拶をあからさまに受けること」は別物である。

なお，いまの「うん」「はい」のように，フィラーが発せられない方がよい（といっても程度問題であり，また理由もさまざまであるが）ということを以下では仮にフィラーの「不生起の義務性」と呼び，反対に，フィラーが発せられる方がよいという「生起の義務性」つまり「必要性」と合わせて，「(不) 生起の義務性」とまとめることにする。

以上，認識の修正と挨拶という例を使って，「何事かをあからさまにおこなうこと」が発話の「特権性」や「(不) 生起の義務性」といった形で会話参加者間の社会的関係に関わり，「何事かをおこなうこと」とは別物であることを示した。

付言しておくと，コミュニケーションの研究にとって，あからさまなレベルだけが重要で，あからさまでないレベルは無視できるというわけではない。たとえば「聞こえよがしにものを言う」という発話行動は，あからさまなレベルでは相手に聞かせる意図が無いが，あからさまでないレベルでは相手に聞かせる意図が有るという形で，両レベルが合わさってできている。このように，あからさまでないレベルもコミュニケーション研究においては重要であり，無視できない。

## 5. 認知行動をあからさまにおこなうこと

本稿が提案するのは，「さー」にかぎらず，会話においてフィラーを発するとは，そのフィラーと結びついている認知行動(「さー」の場合なら「ダメもとの問題検討」) をあからさまにおこなうことだ，という考えである。以下では，第3節末尾で述べた「意図的な伝達」というフィラー観との違いを示しながら，この考えを紹介しよう。

もちろん，話し手が会話においてしゃべる音声，表情や仕草の映像は，会話相手の目や耳に（ごく常識的な意味で）「伝達」されるのであって，本稿で提案されるフィラー観「認知的行動をあからさまにおこなう」にしたところで，基盤にはやはりその意味での音声や映像の「伝達」がある。だが，その意味での「伝達」は，コミュニケーション以前の伝達である。たとえば海岸で一人，波の音を聞き，海の色を眺めるという，コミュニケーションではない場合にもその意味での音や映像の「伝達」は生じている。「会話においてフィラーを発するとはどういうことなのか」という問題意識に立つ本稿は，コミュニケーション行動としてのフィラー観を問うているのであって，コミュニケーション以前の「伝達」は問題にしていない。本稿では「他の会話参加者に（自身の認知状態を）伝達する」というフィラー観を退けようとしているが，あらゆる意味での「伝達」的な考えを退けようとしているわけではないということに注意されたい。

実際のところ，コミュニケーション行動としての伝達だけに純粋に従事する者ができることはかぎられている。たとえば病院で，或る薬を投与された患者が「持病を抑えるためにいつも飲んでいる薬も一緒に飲んでいいでしょうか」と窓口の看護師にたずねたとする。看護師が，他の仕事もテキパキと片付けながら，奥にいる医者に判断を仰ぐと，医者は大丈夫と言うので，それを受けて看護師は，やはりさまざまな仕事を片付けながら，窓口の患者にその旨を伝える。その際の，看護師に対する医者の返答発話と，患者に対する看護師の返答発話として，次の (8a, b) を比べると，

(8) a. その薬は大丈夫です。
　　b. えーと，その薬は大丈夫ですね。

看護師に対する医者の返答発話は (8a) でも (8b)



NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan



でも自然だが，患者に対する看護師の返答発話は，(8a) が問題なく自然であるのに対し，(8b) は自然さが低い。このことは，「医者は検討して（つまり考えて）看護師に返答するが，看護師は医者から言われたことを患者に伝達するだけで，検討しないから」といった単純な考えでは説明できない。なぜならば，この事例では看護師は他のさまざまな仕事も同時にこなしているわけであるから，たとえ医者がたったいま述べたことでも，看護師が他の仕事に気を取られて「いま，この医者は何と返答したのだったかな」と心内で検討するといったことは十分想定できるが，その想定のもとでも (8b) は不自然だからである。

つまり，検討中のフィラー（「えーと」など）や，検討結果を見極める際の終助詞（「ね」「な」など）を発する権利に関して，医者と看護師は違っている。医者は，いま焦点になっている問題［この患者は2つの薬を一緒に飲んでもよいか］を自分の問題として引き受け，検討によって答を「作り出す」者であり，これらのフィラーや終助詞を発する権利を持つが，看護師は作り出された知識を患者に「意図的に伝達する」者であり，同様の権利を基本的に持たないので (8b) は不自然である。(8b) の不自然さは，「医者がすぐ近くにおり，患者に対する看護師の発話が患者だけでなく医者にも聞こえる」「看護師に対する医者の返答の声が大きく，看護師だけでなく患者にも明らかに聞こえていた」などの状況では特にはっきりする。これらの状況は，看護師が当該の知識を「意図的に伝達する」者としての立場を越えて，知識を「作り出す」者らしく振る舞うことを困難にする状況である。

看護師は，いま焦点となっている問題の答である知識［この患者は2つの薬を一緒に飲んでもよい］を患者に伝達する際，自身の認知状態（さまざまな検討の最中であること）をたとえいくら伝達しようとしたとしても，その知識を作り出すための検討をしていないので，検討中のフィラーを発する権利がない。会話においてフィラーを発するという行動を「自身の認知状態（検討の最中であることなど）の意図的な伝達」と考えてしまうと，このことが説明できない。これとは対照的に，会話においてフィラーを発する行動を，フィラーと結びついている認知行動をあからさまにおこなうことと考える本稿の立場では，このことは前節で示した「あからさまなレベルと特権性の関わり」としてとらえることができる。患者が2つの薬を一緒に飲むことの可否を発話中にフィラーを発してあからさまに検討できるのが，その知識を作り出す，つまりその知識に関して根本的な責任を持つ医者にかぎられているということは，「た」の文を発して認識をあからさまに修正できるのが，運転手席に座ったり，「田中は来る」と言って皆をミスリードしたりした「責任者」にかぎられていることと，基本的に同じである。

「認知行動をあからさまにおこなう」という考えはさらに，フィラーだけでなく，りきみや空気すすりといったパラ言語行動にも適用できる。検討中でありさえすれば誰でも自由に「えーと」などとフィラーを発したり，りきんだり，「スシューッ」と音を立てて空気をすすったりできるというわけではない。（それでは会議はうるさくてたまらない。）これらをおこなえるのは，いま発言中の者（たとえば空気すすりなら「で，これは，スシューッ，ちょっとわかりませんが」），これから発言しようとする者（「スシューッ，ちょっとそれ違うんじゃないですか」），発言を求められたがやり過ごそうとする者（「○○君，宿題は？」「スシュー……」）というように，「発言権に関わる者」とまとめられているが（定延 2005, 2007b），これを「自分の問題として責任を持つ（持たされる）者」ととらえ直すこともできる。

## 6.「あ」の必要性（生起の義務性）

前節では，会話におけるフィラーの特権性（フィラーを発することがしばしば会話参加者の一部だけの特権であること）を説明する上で，フィラーを「自身の認知状態の伝達」と考えるよりも「認知行動をあからさまにおこなうこと」と考える方



NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan



が有効であることを見た。ここでは，「個々の状況しだいでは，必要（つまり生起が義務的）になり得る」というフィラーの性質を説明する上でも，やはり同様であることを示そう。第1節でも述べたように，フィラーは伝統文法の「感動詞」とほぼ重なるので，「気分」次第で発せられたり発せられなかったりするという印象があるが，実際には「この文脈ではフィラーが必要（あるいは期待される）」ということがある。

例として取り上げるのは，気づきという認知行動と結びつくフィラー「あ」の，或る状況のもとでの必要性（生起の義務性）である。

実は，フィラー「さー」は絶望的ではあるが，肯定的な内容の発話とどのような形でも決して結びつかないというわけではない。たとえば交番のありかを訊ねられた場合，「さー，あ，あの角を曲がったところにあります」のように，気づきという認知行動と結びつくフィラー「あ」を介在させれば，「さー」と肯定的内容の発話とは間接的ながら結びつく。これがまさに，第3節で紹介したアンケート調査において，(3a) の発話（「さー，交番はあの角を曲がったところにあります」）を自然と判断した1名の被験者の直観であり，この被験者は勝手に (3a) に「あ」を補った上で自然さを判断していたことが判明した[12]。しかし，「あ」が無ければフィラー「さー」と肯定的内容の発話が結びつかないということは，フィラー「さー」の絶望性という形で紹介したとおりである。

このように，フィラー「さー」と肯定的内容の発話が結ばれる際の，フィラー「あ」の必要性（生起の義務性）の高さは，【フィラー「あ」は自分が交番のありかに気づいたことを伝達するためのもの】という伝達的な発話観では説明できない。フィラー「あ」は，何事か（いまの場合は交番のありか）に気づくという認知行動と結びついているが，話し手が交番のありかに気づいたということは，「あ」を言わずとも，「あの角を曲がったところにあります」と言うだけで十分に伝達できるはずだからである。というのは，そもそも「あの角を曲がったところに」という発話は，話し手が交番のありかに気づいて初めて可能になる発話だからである。

フィラーの必要性（生起の義務性）はより穏やかなものになるが，伝達的な発話観の問題点を同様にはっきりさせるための作例として，或る会議に参加できるかどうかを問い合わせてきた者Xと事務局員Yの会話例 (9) を挙げる。

(9) X1：いまから会議に参加できますか？
　　Y1：失礼ですが会員様でしょうか？
　　X2：はい会員です。
　　Y2：ご参加いただけます。

会話 (9) では，「いまから会議に参加できるかどうかは，会員かどうかによって異なる」という事情のために，YはXからの問い合わせ (X1) に即答せず，逆にXに対して会員かどうかをたずね (Y1)，Xからしかるべき返答 (X2) を得た上で，冒頭の問い合わせ (X1) に返答している (Y2)。X1とY2が質問と返答の隣接対をなし，その中でY1とX2が質問と返答の隣接対をなすという，挿入連鎖（insertion sequence）と呼ばれる構造となっているが，発話はスムーズに流れて迅速な伝達が達成されており，何も問題はないかに思える。だが，実際にはY2の発話はともすれば「つっけんどん」「ぶっきらぼう」という悪印象をもたらしがちである。より丁寧な印象を生み，事務局員Yとしてより望ましい（この意味で必要性の高い）Y2の発話とは，「あ，でしたらご参加できます」のように，フィラー「あ」「でしたら」などが挿入されたものである。フィラー「あ」は気づきと結びつき，フィラー「でしたら」は気づいたことから推論を働かせるという認知行動と結びつくが，フィラー発話を伝達行動としてとらえようとすると，これらのフィラーの必要性の高さも説明できない。Yが「相手Xは会員だ」と気づき，「会員ということは…」のように，そこから考えをめぐらせているということは，「あ」「でしたら」を言わずとも，「ご参加できます」という発話だけで十分に伝達できるはずだからである。というの



NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan



は，この発話は，Xが会員であることにYが気づいて初めて可能になる発話だからである。

以上のような「あ」や「あ，でしたら」の必要性（生起の義務性）は，「認知行動をあからさまにおこなうこと」というフィラー観を持てば次のように説明できる。前節で述べたのは，会話の中でフィラーを発して，自身の認知行動をあからさまにおこなうのは，会話の中で焦点になっている問題を自身の問題として引き受け，責任を持とうとする者の特権だ，ということである。「特権」とは述べたが，これは便宜上の呼称であって，話し手はふつう「権利があるから行使しよう」と意図してフィラー発話に及ぶわけではない。「特権」とは，会話参加者たちが会話の流れの中でフィラーを発したり発しなかったりする様を外部から観察すると，フィラーの発し手が一部にかぎられているということを形容したものに過ぎず，それが責任意識に関わっているというのが前節で述べたことである。焦点になっている問題に対して話し手がこの責任意識を持つほど，フィラーは発話されやすくなる。交番のありかを訊ねられ，「さー」と絶望的なフィラーを発して，否定的な方向（いまとなっては誤った方向である）に話をミスリードしてしまった者や，問い合わせしてきた者のために便宜をなるだけはかってやろうと奉仕する事務員は，この責任意識を持ちやすいので，フィラーを発しやすくなる。つまり「特権」と同様，「必要性（生起の義務性）」という呼称も，外部から観察された結果を便宜上呼んでいるものに過ぎず，話し手自身意識している（必要だからフィラーを発している）とはかぎらない。話し手はただ，会話の中で焦点になっている問題を自身の問題として引き受けたり，引き受けなかったりしているだけで，引き受けた場合に自然にフィラーが口をついて出てくる。それが常に例外なく観察されるのが必要性（生起の義務性）である（定延2008a）。

この点では絶望的なフィラー「さー」も同様である。心内の認知行動が「ダメもとでの検討」である点を除けば，会話相手から問題（たとえば交番のありか）を訊ねられ，その問題を自身の問題として引き受け責任意識を持つことで，話し手がフィラーを発して心内の認知行動をあからさまにおこないやすくなるということに変わりはない。これが丁寧になり得るのは，相手からの問題の持ちかけを無視してしまってもいいような関係（たとえば通りすがりの関係）によるものである。「さー」の丁寧さが不可解に感じられるとすれば，それは「ダメもとでの検討などは時間の浪費にすぎないはず」という，伝達中心のコミュニケーション観を前提としているからであって，現実の日本語社会では，本来は相手にのみ属する問題を自分の問題として引き受けて，問題を相手と共有することが「親身になってくれる」と歓迎されることは珍しくない（定延2008b）。ダメもとでの検討姿勢が売り込まれている企業広告（10）はその一例である。

（10）いつもニッコリほほえんで「やってみます」のミドリです
「できません」と言う前に「やってみます」のミドリです
（ミドリ電化CMソング「やってみます！の歌」http://www.midori-de.com/picup/midori-uta.htm）

以上では，「状況次第では生起が義務的になる」というフィラーの性質を取り上げたが，「状況次第では不生起が義務的になる」というフィラーの性質もやはり「当該の認知行動をあからさまにおこなう」というフィラー観でうまく説明できる。このことは，あからさまなレベルとあからさまでないレベルを二分する必要性を紹介する箇所で（第4節），「うん」「はい」が挨拶発話を偉そうなものにしてしまう（したがって，多くの状況では生起しない方がよい）という現象を説明する形で，すでに示したとおりである。



NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan



## 7. 誤用不可能性

本稿が提案する「当該のフィラーと結びついている認知行動をあからさまにおこなう」というフィラー観は，特に「あからさまにおこなう」という部分が話し手の意図を感じさせるかもしれないが，それは筆者の本意ではない。フィラーの発出が意図的に，何らかの目的を達成するためなされるということはもちろんあるが，そうでないことも多い。つまり話し手の意図を持ち出すことで説明できるフィラーの生起は一部にとどまる。最後にこの点にも触れておきたい。

確かに，第4節末尾で取り上げた「聞こえよがしにものを言う」のように，あからさまでないレベルで意図を持つコミュニケーション行動はある。フィラーも同様に，何気ない風を装いながら，あからさまでないレベルでは意図的に「わざとらしく」発せられるという場合が無いわけではない。だが，その場合でも，あからさまなレベルには意図は無い。また一般に，あからさまでないレベルにおいても，意図は原則として無いというのが筆者の考えである。もちろん，自分がこれからフィラーを発することの「意識」はされ得るが，フィラーを発しようという「意図」は原則として，あからさまなレベル・あからさまでないレベルの双方とも無いということである。（たとえば「こんな大声では隣室にいる当人に漏れ聞こえてしまうとわかっていながら，酒のせいでつい気が大きくなり，悪口発話を自分で止められなかった」ということが「聞こえよがしにものを言った」ことにはならないように，「意識」と「意図」の区別は重要である。）

このように発話意図を原則として切り離すのは，母語話者にとって自然発話におけるフィラーがイントネーションなどと同様，誤用とは無縁という性質（仮に「誤用不可能性」と呼ぶ）を備えているからである。学習者にとって一つ一つのフィラーを習得することが困難を極めるのに対し，母語話者はものごころついた段階から，フィラーを間違えたり，思い出せなかったりということが無い。たとえば「会計業務システム」のような，母語話者であっても日々意図的に覚え，意図的に思い出し，意図的に使い分けることばは，覚え間違い，思い出し損ない，使い分け間違いから無縁ではいられない。フィラーがそのような誤用から自由であるということは，フィラーがそもそも意図的な操作の対象とは違ったあり方をしているのではないか。

意図から離れたことばのあり方については，次の（11）のような，状況との密接なつながりが指摘されている。

（11）状況と話し手の発動性とがかみ合ったときに，ことばが自然に滑りだしてくる。こうした発話を自動的なことばとよび，意図的なことばと区別する。それらは機能として局在化しており，むしろ日常的なことば，身体化されたことばは壊れにくいという。これは失語症の研究などの神経心理学の分野において「自動性—意図性乖離（かいり）の法則」とよばれているものである。（岡田 1995, p. 63）

どのような状況でも自由に持ち出せる「会計業務システム」のような「意図的なことば」とは対極的な位置にフィラーがあるとすれば，フィラーの考察は，ことばと状況との関わりを問い直す作業の中でさらに進めていかねばならないだろう。

## 8. おわりに

本稿では，日本語のフィラーの5つの性質の観察を通して，会話においてフィラーを発話することの意味を検討した。まず，フィラーの「翻訳不可能性」（微妙なニュアンスまでも含めた完全な翻訳が厳密にはできないという性質）を根拠として，フィラーには認知的側面だけでなく社会的側面もあるということを論じた上で，両側面を統合する統一的なフィラー観として「意図的な伝達」には限界があることを示した。より具体的には，



NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan



「会話の中でフィラーを発するとは，フィラーと結びつく認知行動を自身がいまおこなっているということを会話相手に伝達すること」という伝統的なた考えは，フィラーの「絶望性を持ち得る」（後続の発話内容が必ず否定的なフィラーがあり得る）という性質，さらに「特権性」（会話参加者の一部にしか許されない）という性質，「状況に応じた（不）生起の義務性」（状況に応じて必要になったり，有ってはならなくなったりする）という性質，そして「誤用不可能性」（母語話者が自然発話において誤用と無縁であること）を説明できない。これらを説明する上で「意図的な伝達」よりも有効とされたのは「認知行動をあからさまにおこなう」というフィラー観である。

現在のコミュニケーション論では，話し手の意図を聞き手が推論する過程が重視されるあまり（たとえばGrice 1957の「非自然的意味」（non-natural meaning）や「推論的伝達」（inferential communication），Sperber and Wilson 1986の「情報意図」（informative intention），「伝達意図」（communicative intention），「意図明示的推論コミュニケーション」（ostensive-inferential communication）を参照），意図や伝達の枠組みから外れる部分はともすれば見えにくくなってしまいがちである。だが，本稿で論じたことが正しければ，日本語会話の多くの発話（つまりフィラー cf. Campbell 2005）は，まさにその部分に群生しているということになる。

## 謝　辞

改稿に向けて貴重で有益なご助言を下さった匿名の査読者に感謝したい。また，本稿は，日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究（A）（課題番号：19202013，研究代表者：定延利之）の成果の一部であるが，感動詞については基盤研究（B）（課題番号：19320067，研究代表者：友定賢治），終助詞については基盤研究（C）（課題番号：21520423，研究代表者：井上優），音調については基盤研究（B）（課題番号：19300073，研究代表者：Nick Campbell），コミュニケーションについて基盤研究（A）（課題番号：20242026，研究代表者：菅原和孝）で得られた知見に基づく部分がある。さまざまな考察の機会を筆者に与えて下さった各位にお礼申し上げたい。

〔注〕

1) 「感動詞」じたい，挨拶ことばを含めるか否か，応答のことばとの区別をどうするかなどに関して研究者間で見解の一致が得られているわけではなく漠然としている部分があるが（前者については加藤 2006, p. 134，後者については定延 2002を参照されたい），本稿はそれらの問題を追求するものではないので，「ほぼ重なり」という大ざっぱな記述にとどめておく。

2) 日常会話に頻出する語群の多くがフィラーであることを計量的に示したキャンベル（2010）は，同氏の講演を元にしているが，その講演では「フィラー」という否定的なイメージの用語は命題部分（たとえば「えーと，田中です」なら「田中です」の部分）を指すよう再定義され，伝統的にフィラーと呼ばれてきた語群は，よりイメージの良い「ラッパー」（wrappers 包み込むもの）へと呼び改められたほどである（林・定延編 2010, pp. 106–107の解説を参照）。

3) この第3節冒頭で述べたように，ここでは「何事かを検討している最中に発せられるフィラー」を問題にしている。「さー，行こう」のような，ここで問題にしている「さー」とは別物と思われる「さー」は除外していることを断っておく。

4) 会話音声研究と隣接ないし連続すると思えるコミュニケーション研究では，内省を重視する（たとえばChafe 1992），計量調査の有効性に留保を付ける（たとえばSchegloff 1968）といった立場はめずらしくない。コミュニケーション研究におけるさまざまな「根拠」観については伝・田中編（2006），定延（2010a）を参照されたい。

5) この自然会話データは，科学技術振興機構の戦略的創造研究推進事業（CREST）プロジェクト「表現豊かな発話音声のコンピュータ処理システム」（2000–2004年度，研究代表者：ニック・キャンベル）により収録されたものである。ここでの書き起こしは簡略化してある。

6) 例（1）の発話は男女とも関西方言混じりのものだが，このような発話のことばも筆者の判断で「共通語」の範囲に収めたことを断っておく。



NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan



7) ここでは「さー」「さあ」という表記の差は無視している。また，原典中のルビは略した。

8) 被験者の容認度が（b）よりも（c）が高いことからすると，「さー」後に話し手が続ける発言の内容は，否定的なものの中でも，内在的な原因（つまり，わからないという事情）に基づくものが基本と言ってよいかもしれないが，本稿ではこの問題には立ち入らない。

9) 念のために言えば，「うー」以下の男性の発話を「わかりません」のような発話と同一視することで前触れ説を保持することはできない。そもそもこの同一視には無理がある。たとえば「残念ですが，わかりません」が自然である一方，「残念ですが，うーんどうなんでしょう」などが不自然であることを考えられたい。

10) サイドブレーキの位置は車種によって異なるが，この事例では，サイドブレーキは運転主席と助手席の間にあり，車内のどの位置からも無理なく見えるものと考えられたい。また，念のために断っておくが，（6b）の「た」発話をおこなう話し手にとって必要なのは，サイドブレーキを事前にかけていたことではない。その車が第三者によって用意されたレンタカーであり，事前にサイドブレーキをかけていた人物が運転席に座った人物ではないという状況設定は，このためのものである。

11) 「X の挨拶終了から Y が挨拶を開始するまでに長い間がある」「先に挨拶するのはいつも決まって X の方である」といった事情があればもちろん別である。

12) この被験者は，自身で「あ」を補った上で（3a）の自然さを判断していたということが，たまたま可能となった追跡調査で判明した。

## 参考文献


岡田美智男（1995）『口ごもるコンピュータ』共立出版.

加藤重広（2006）『日本語文法入門ハンドブック』研究社.

キャンベル，ニック（2005）「日常生活における気持ちの伝え方」林・定延（2010 編），114–137.

定延利之（2002）「『うん』と『そう』に意味はあるか」定延利之（編）『「うん」と「そう」の言語学』75–112，ひつじ書房.

定延利之（2005）『ささやく恋人，りきむレポーター――口の中の文化―』岩波書店.

定延利之（2007a）「序」定延利之・中川正之（編）『音声文法の対照』1–14，くろしお出版.

定延利之（2007b）「日本人が空気をするとき」定延利之・中川正之（編）『音声文法の対照』129–147，くろしお出版.

定延利之（2008a）「りきむ権利・りきむ義務」『日本語学』27:5, 178–186，明治書院.

定延利之（2008b）「伝達の構図にはまらない丁寧さ」『文学』9:6, 51–61，岩波書店.

定延利之（2010a）「音声コミュニケーションに関する研究交流のために」岡田浩樹・定延利之（編）『可能性としての文化情報リテラシー』127–137，ひつじ書房.

定延利之（2010b）「『た』発話をおこなう権利」日本語／日本語教育研究会（編）『日本語／日本語教育研究』1, 5–30.

定延利之・田窪行則（1995）「談話における心的操作モニター機構―心的操作標識『ええと』と『あの（一）』―」『言語研究』108, 74–93.

伝康晴・田中ゆかり編（2006）『方法』（「講座社会言語科学」第 6 巻）ひつじ書房.

林博司・定延利之（2010 編）『コミュニケーションどうする？どうなる？』ひつじ書房.

Chafe, Wallace (1992) "Immediacy and displacement in consciousness and language." In Dieter Stein (ed.) *Cooperating with written texts: The pragmatics and comprehension of written texts* (pp. 231–255). Berlin: de Gruyter.

Grice, Paul (1957) "Meaning." *Philosophical Review* 66, 377–388.

Sadanobu, Toshiyuki (2004) "A natural history of Japanese pressed voice." *Journal of the Phonetic Society of Japan* 8(1), 29–44.

Schegloff, Emanuel A. (1968) "Sequencing in conversational openings." *American Anthropologist* 70, 1075–1095.

Schiffrin, Deborah (1988) *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.

Schiffrin, Deborah (2001) "Discourse markers: language, meaning, and context." In Deborah Shiffrin, Deborah Tannen, and Heidi E. Hamilton (eds.) *The handbook of discourse analysis* (pp. 54–75). Oxford: Blackwell.

Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986) *Relevance: Communication and cognition*. Oxford: Blackwell.


(Received Aug. 31, 2010, Accepted Nov. 24, 2010)



NII-Electronic Library Service